

# だいこんの栽培

ナカハラのたね

## ①はじめに

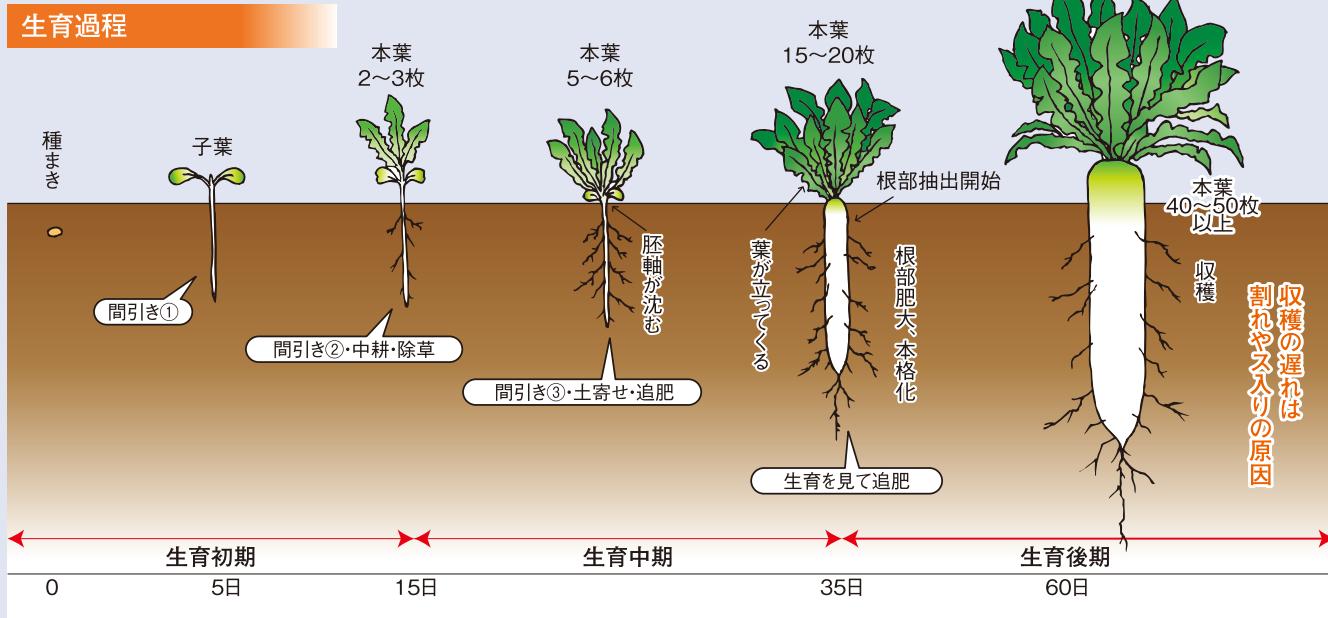
大根の原産地については古くからいろいろな説が唱えられているが、中央アジアが原産地である事は間違いないようである。多くの文献にいろいろな呼び方でだいこんが記されているが、和名では於保禰（おほね）、須々志呂（すずしろ）、根白（ねじろ）などと呼ばれていたようである。一般に冷涼な気候を好み、生育適温は20℃前後が良いとされ低温限界が5℃、高温限界が30℃くらいと考えられている。種子の発芽適温は15~25℃とされており、低温限界は4℃、高温限界は35℃といわれている。ところで大根は収穫して見ないと判断しない土中の作物。しかしプロはしっかり良い大根（秀品）が出来たかどうかの判断は、葉の状況である程度見分けが付き、その年の出来不出来が予想できる。あくまで圃場の条件を知り尽くしたプロならではの栽培方法、言わば技を熟知しているからである。圃場は保水性、排水性、保肥力等の大根の生育に合った環境が適している。以上のような良い立地条件を求め土づくり、環境づくりに力を注がないと見事な『だいこん』は出来ないと考えられる。…とは言うものの『だいこん』はそこそこ出来る代物である。

## ②施肥

春・秋は肥料をかなり必要とする時期なので、収穫まで完全に肥料切れとならないように、コンスタントに効く肥料設計を行うことが大切である。（適量施肥が重要）

追肥は一般に2回程度であるが、こまめに3~4回に分けるかロング肥料を上手く利用して、ゆっくりと育っていく大根栽培に心がける。肥料切れすると入り、変色（10月・4月頃の収穫）等の老化をひきおこし商品価値をおとす原因となるので特に注意する。

## 生育過程



## ④栽培

作物は天候により大きく左右されることが多く、その状況に応じた判断の栽培管理が必要不可欠である。今年は早く寒くなるとか、暖冬であるとか予測し、第六感（センス）も機能させ、それに今までの経験も生かし大根栽培に精力を注がなければならない。長年の積み重ねと大根栽培に取り組む姿勢等も大きく関係して品質の高い大根が出来るものと確信する。又、大根作りは品種の特性と適期も含め総合的に考慮して栽培するが、大事なのは大根作りに適した立地条件を満たした場所の選択を最初に誤らない事も念頭に入れていただきたい。



発芽適温: 15~25°C	10a当たり播種量(約300坪)	20ml当たり粒数	発芽適温: 15~25°C	10a当たり播種量(約300坪)	20ml当たり粒数
秋 ま き	5~6dl	700~1,000	二十日だいこん		
春 ま き	3~4dl	1,200~1,500	葉大根（葉とり）	2~2.5l	800~1,000
			ミニだいこん	5~6dl	900~1,100

# 大根栽培の秘訣

秋まき  
編

ナカハラのたね

## 1) はじめに



大根の花

大根はアブラナ科に属し、原産地は幾つかの説があり地中海沿岸や中央アジアとも言われていますが、有力なのは東南アジアのようです。日本国内においても歴史は長く、日本人の食生活に欠かせない野菜の一つとして古くから栽培されています。和名で「保禰(おほね)」、須々志呂(すずしろ)、根白(ねじろ)などと呼ばれて親しまれ、全国各地に在来品種も

数多く分布しています。本来、大根は冷涼な気候を好みます。これまでに品種改良が進み四季を通じて栽培が可能になりました。根部は煮物、漬物、生食、切り干し、おろしなど様々な用途に利用できます。切り取った葉の部分も栄養価が高いので、味噌汁の具材や浅漬、和え物、炒め物などに利用して食卓に並べてみては如何でしょうか。



写真:YRおでん大根

## 2) 品種の選定

目的に応じて地域や気候に適した品種を選ぶことがポイントになります。現在の市場で多く流通しているのは「青首総太型」という大根です。肌のツヤ、形の揃いが良い品種が重要視され、秋まきの品種では「青づまり2号大根」や「YR秋作大根」などがあり、また直売所などでは安心・安全・鮮度を売りにした美味しい肉質が緻密な品種「与作大根」や、一風変わった品種「からみ大根」などが目玉商品として人気です。また加工用としても根の肌が美しく揃いが良い「YR早生おでん大根」や、生漬専用の「羊太郎大根」などがあります。

## 3) 園場準備

土壤の適応性は比較的広く、土層が深く柔らかで排水性と保水性が両立できた園場を好みます。前作の未熟な有機物が残ったままだったり、耕土が浅かったりすると根曲がりや叉根などの原因となり、硬く締まった園場では肥大が阻害され肌が荒れます。10a当たりに苦土石灰を100Kg、ホウ砂かホウ酸を1~1.5Kg程度施用して深耕・碎石を十分に行い、硬い石などは丁寧に取り除きます。幅60cm・高さ20~30cmの(土層が浅い場合には高め)畝を立てて深く膨軟な園場準備を心掛けましょう。Ph5.5~6.5が適切です。また連作すると有機質不足による生理障害が発生しやすいので、2~3年以上の間隔を空けるほうが望ましいでしょう。

## 4) 施肥

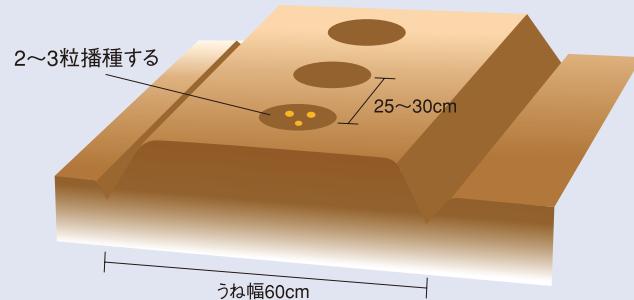
施肥量は10a当たりに成分量でN15~20Kg、P10~12Kg、K12~15Kgを基準とし、播種の10日~20日前には全面にすき込み土に馴染ませます。(大型の晩生品種を栽培する場合はやや多めに施します。)

肥料切れすると入り、変色等の老化の原因となり商品価値を落とします。追肥は生育の様子を見ながら早生種で2回、中~晩生種で3~4回が適当で畝の両肩部に施用します。(マルチ栽培では液肥を利用するとよいでしょう。)

## 5) 播種

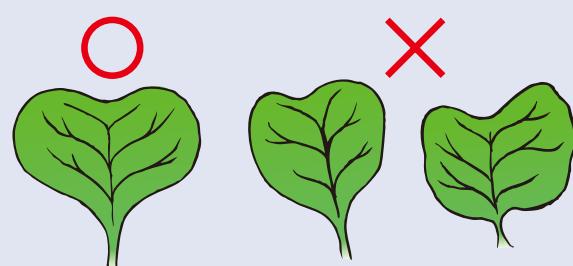
ダイコンの発芽適温は15~20°C、生育適温は15°C前後です。そのため家庭菜園では秋にタネをまき、冬に収穫するのがもっとも育てやすい環境だといえます。地域の環境にあった品種の選定がカギを握ります。発芽を揃えるため圃場が適当な湿度を保っていることを確認してから、一定の深さ(1.5cm程度)に2~3粒ずつ播種します。近年、産地ではシーダーテープ及び真空播種機による2粒播きが一般的になり、間引きの省力化も進んでいます。

### 露地栽培



ダイコンの根の長さは生育初期でほぼ決定するので発芽まで徹底した水分管理をして一斉発芽を目指します。本葉2~3枚のころから密集した箇所や不良な株を間引き、本葉4~5枚の頃に中耕・土寄せを兼ねて2回目の間引きを行ないます。また必要に応じて中耕を兼ねて3回目の間引きを行ない最終的に株間20~30cmの1本立ちにします。この作業が遅れると徒長し、その後の生育に影響を与え秀品率の低下を招きます。

### 間引き

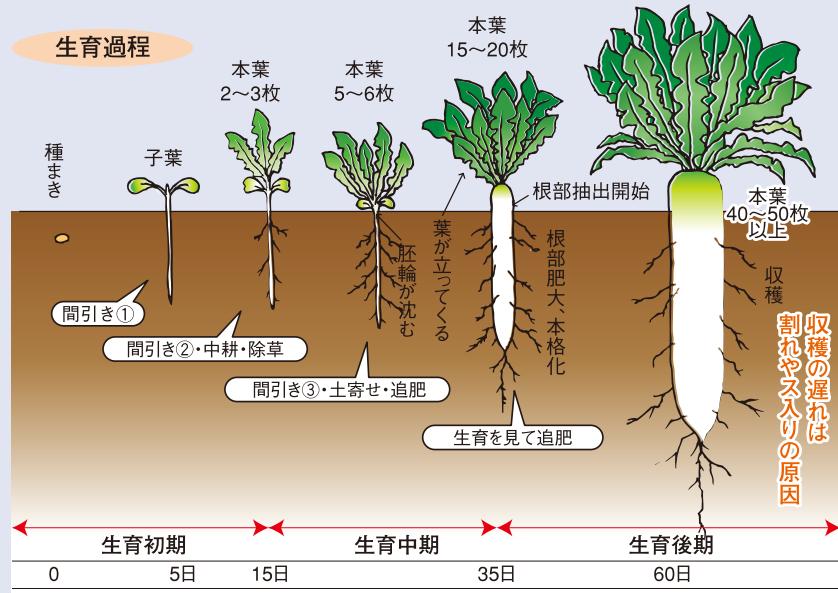


子葉の形がきれいなハート型のものを残す

## 6) 栽培型と品種

### 【初秋まき栽培】

最も栽培容易な作型です。一般地の場合では気温が下がる晩夏～初秋（8月下旬～9月中旬）に播種し、厳寒期に入る前（年内）に収穫します。品質・収量ともに期待が持てますので、初心者の方ならこの時期から始めるのがベストです。プロの方は、生産量が最も多い時期に市場で高く評価されるように優良品種を選び、省力化と秀品率を上げて収益アップに繋がります。



### 【晚秋まき栽培】

低温伸長性をもつ晩生タイプの品種を晩秋（10月）に播種し、年内に7～8割程度肥大させ、1～3月に収穫する作型です。

冬季の気候が温暖な地域に適していますが、近年では一般地でのトンネルやマルチを用いた栽培が普及しています。

### 【個性派品種】

直売所での販売に有利な色や形に特徴のある一風変わった品種を紹介します。直売所の魅力は、地元でとれた安心で新鮮な野菜、そして価格面と言われますが、一般にあまり流通していない商品が並んでいるのも楽しみのひとつです。一般的な大根を栽培する傍ら、時期をずらしながら少しづつ播いておけば、豊富なバリエーションで長く出荷でき、目玉商品にもなり得ます。

### 【葉とり専用】

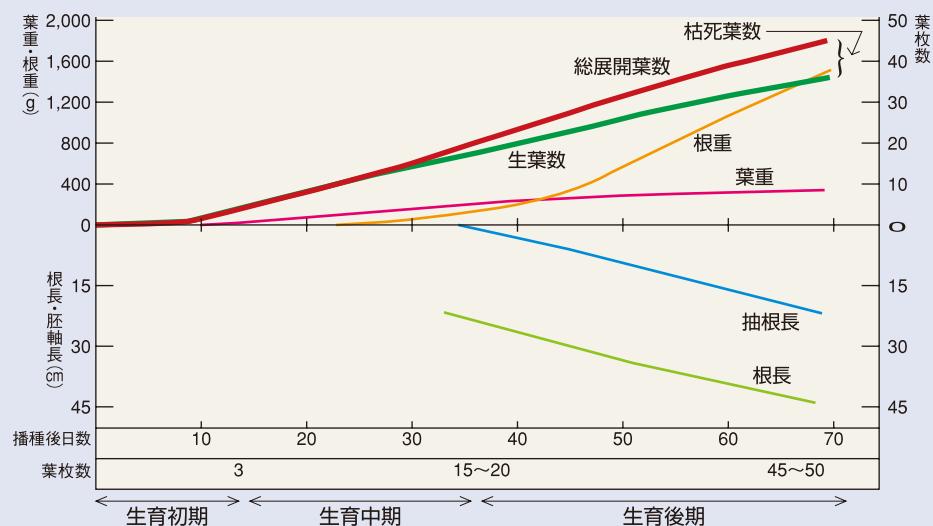
大根の葉と茎を収穫し浅漬けなどに利用します。一般地でのハウス周年栽培や軟弱野菜の作り難い時期での裏作に適しています。葉菜を作る感覚で短期間での栽培ができ管理も容易です。

### 【ハツカダイコン】

別名を『ラディッシュ』といい、短期間で栽培できることから『二十日大根』と呼ばれるようになりました。形や色も豊富なのでサラダの彩りとしても人気があります。品種を使い分けることによりハウスでの周年栽培が可能です。またプランター栽培も可能なのでベランダなどの狭い菜園にも向いています。肌の美しさを強く要求される品目であるため、排水の良い壤土・砂壤土が適しています。1～1.2mの平床に株間4～5cmの4条播き程度にして、あまり密植にならないように注意します。本葉5～6枚、根径2～2.5cmを目安に収穫します。

## 7) 収穫

### ■葉枚数と根の関係(青首総太型)



## 8) ポイント

○近年、温暖化の影響で秋の平均気温が高くなっているので、暑さによる発芽不良や病害虫被害を受けやすくなっています。早まきは避け、寒冷紗による軽い日除けを行なうなど注意が必要です。

○圃場の急激な水・温度変化が肥大バランスを崩し、割れ・空洞化の原因となるので注意が必要です。

○大雨などで肥料が流れたときや、生育が順調でない場合は葉面散布で追肥するのも効果的です。

○害虫被害対策は薬剤散布のほか、防虫ネットや反射フィルムなどの被覆資材を利用することで害虫の飛来を回避する方法もあります。

○生育過程での土寄せは根を固定し、生育を促し、根肌を美しく保つために重要な作業です。